

地水火風空

豊島与志雄

青空文庫

月清らかな初夏の夜、私はA老人と連れだつて、弥生町の方から帝大の裏門をはいり、右へ折れて、正門の方へぬけようとした。二人とも可成り酔っていた。不忍池の蓮の花に、月の光が煙っているのを眺めながら、一杯傾けての帰りなのである。

八角講堂の裏の、薄暗いだらだら坂を上りきつて、ぱつと蒼白い月光の中に出た時、A老人は突然立止つて、私の肩を叩いた。

「どうだい、こうして眺めると、大学というものも悪くないね。」

A老人が振向いた方を眺めると、辰野工学博士の傑作の一つとされてる工科大学の建物が、中世紀風のシャトーの姿を、星屑の淡い夜空に、くつきり聳やかしている。全体が優雅に模糊として、

頂のクレノーが厳めしい。

ほほう、これはまた不思議だ……と私は思ったのである。頭髪半白な剽軽なA老人が、ゴシック式のシャトーを讃めようとは。

だが、老人の眼は、よく見ると、工科大学の建物の方へではなく、すぐ前の、こんもりと茂った木の下影の、何だか怪しい物に注がれていた。

「何を見ているんですか。」と私は尋ねた。

「何をだと……。」そして彼は私の顔をじっと見返した。「君は大学で何を学んだ。」

「何をつて……。」

「いや、大学に幾日通った。」

私はその変挺な問に、咄嗟には答えられなかった。

「はははは、変な顔をしているね。問抜けじゃないか。俗悪な銅像や石像が並んでる中に、万緑叢中紅一点という碑があるのを知らないのか。」

「へえー、紅一点……。」

「あれさ、よく見てごらん。」

指差されたのは、紅一点どころか、怪しげな恰好の物だった。人の身長ほどの高さの、上に饅頭笠を被って、低い台の上に立っている。円い筒、川瀬が化けるといふ坊主姿のような石の碑だった。それが、地面から七八本の幹になってこんもりと茂ってる冬青樹の下影の、八手や躑躅の茂みの間に、ぼんやりつつ立っている。

る。

「あの碑ですか。」

「そうさ。大学中で一番面白い風流なものだ。知らなかったのか。迂濶だね。……碑の表と裏とがまた素敵だ。」

私達は芝原の中に歩み入って、碑を眺めた。円柱の南面には、長方形に削り取られた中に、もう磨滅しきった臃な仏の立像が、かすかにそれと見分けられる。北に廻ってみると、円柱の面にいきなり梵字で「キャ・カ・ラ・バ・ア」と五字刻んである、アの子の下半分が磨滅して、古色蒼然としている。キャカラバアと云えば、地水火風空の意味である。

「この碑の由来を知っているか。」

「知りません。」

「なに知らない。君は大学に三年も通つて、何を学んだ。」

私は反問した。

「じゃあ、この碑の由来を、あなたは御存じなんですか。」

「はははは、わしも知らない。」

私は唾然とした。

月の光が一面に降り注いでいた。その光の下のこんもりとした木影の中に、ぬっと立っている仏像と梵字の碑が、怪しく私の頭に刻み込まれた。

それは、私が大学を卒業して四五年後の話である。

それからやがて、大正十二年の大地震が起つた。大学の中はめちゃくちゃになった。碑のことなんかを、恐らく誰一人顧慮する者はなかつたらう。

翌年の春の半、私は或る爽かな夜の九時頃、酔心地のものうい足を引きずつて、不忍池の方から戻つて来て、大学の裏門から正面へぬけようとした。そして、八角講堂の裏を通る時、ふと、季節こそ違え同じような気分で、A老人と一緒にそこを通つたことを思い出した。

「あの碑はどうなつたかしら。」

震災のため廃墟のようになった構内を見廻しながら、心覚えのあたりまでやって来ると朦朧な月の光に、破損が却つて風致をま

してる工科大学の古めかしいシャトーを背景にして、これはまた
湍々しい冬青樹の若葉の下影に、例の碑がぬつとつつ立っていた。

「ほほう。」

私はその側に歩み寄って、露に冷い饅頭笠の石の上を、やさしく撫でてやったのである。

愉快だった。

正面前から電車に乗るのを止して、すぐに老人の家を訪れた。
「あの大学の石の碑は、地震にいたみもしないで、元の通り立っていますよ。」

A老人はきよとんとした顔をした。がやがて、それが何のことだか判ると、エヘンと一つ咳払いをしたのである。

「それはそうなくちやならん。」

それ以来、私は碑の前を通る時にはいつも、意識的にまた無意識的にも、その方へ一瞥を投げるのである。そして、遠目には殆どそれとも判らぬ仏の立像を見ながら、裏面の文句を口の中で繰返す。

「キヤカラバア……地水火風空……。」

おのずから神韻縹緲として、胸廓の広きを覚ゆるのである。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年5月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地水火風空

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>